

日本の経済成長をけん引してきた京浜臨海部。その発展は運送業界の存在抜きには語れないとの自負がある。工都・川崎を物流面で支えること半世紀余り。かつては輸送の現場で、今は行政書士として、業界の第一線に立ち続ける。自動車好きが高じて運送会社を創業したのは1970年ごろ。「会社員になつてもそれほどぜいたくできるわけではない。自分で事業をしたかった」。安定性よりも粹にはまらない生き方を選んだ。

当時は右肩上がりの時代。缶詰用の缶をトラックに積みミカンの産地・静岡や桃の产地・山形まで走った。貨車の待つ川崎駅までイカの缶詰用の缶を運んだ時は「こんなにたくさん缶が必要なほどイカは取れるものなのかと驚いた」。

が、2日に1回になつたことが、
もあつた」と当時を懐かしむ。
83年には、行政書士の資格
を生かして事務所を立ち上げ
た。運送事業には行政への申
請がつきもので、手続きを自
ら行つためだが、理由はそれ
だけではない。「業界には書

り、うまく息ができた」と振り返る。モットーは「相手の困り事はビジネスチャンス」。平成期に入ると、PTA会長を務めた縁で、吹奏楽の演奏会に参加する中学生の楽器を輸送する仕事も始めた。「今まで業者に楽器を運んでもらうという発想がなかった。保

護者が自家用車で運び、高価な楽器を壊してしまったこと も多かったようだ」。市が推進する「音楽のまち・川崎」 の取り組みもあり、仕事は徐々に増えていった。

港湾業部会の部会長も運送業界の発展に心を悬々を送る。業界を取り巻く環境は創業時と様変わりが、「運ぶ荷物もあり安請け合いしなくてはならぬ」と好意的に受け止めた。「仕事がある間はまだ隠居できそうにない」と「微力ながら今後も川崎めに尽くしたい」と意図的

工都發展輸送で支え

Person

山下 恭一さん

いました・きょういち 物流事業を手掛ける
一産業会長。東京都出身。17歳の時に家族で
在の川崎市高津区に移り住む。専修大学経済
部卒業。同大卒業後、同社を創業して今年6
で社長。73歳。

